

「五時八教」論争の収束

——関口真大編著『天台教学の研究』書評をかねて——

山内舜雄

はじめに

関口真大編著『天台教学の研究』（昭和五十三年一〇月刊、大東出版社）は、近頃めずらしい構想のもとに出版された本のひとつと云えよう。

それは関口博士が、年来提起されてきた「五時八教」を天台教学の綱要として説くことは、廃棄されなければならぬ。（同書一頁）という主張に対して、捲き起された賛否の「賑やかな論戦」（同上）を、ともに一挙に掲載するという、異例の体裁を採っているからである。まさしく編著といわれる所以である。

如上の問題提起と、その論争経過について、いささかでも関心を有する者にとっては、これ以上の興味をそられる本はないが、関口博士を始め、かかる編集にたずさわった方々の労苦は察するにあまりあるものがあつたらう。心から謝意

を表する次第である。

一 本書の構成

まず、本書の構成を、紹介すると、いまその大要を述べた序論に引きつづいて、直ちに本論に入り

第二章 天台教学に関する私の主張

- 一 五時教判論
- 二 化儀四教論
- 三 化法四教論
- 四 五時八教論
- 五 五時八教は天台教判に非ず
- 六 「五時八教」について
- 七 三種教相論
- 八 四種三昧論

と、博士の所論があますところなく展開される。一三頁から

一二六頁に及ぶ、一〇〇頁を超える分量である。「私の主張」と題する如く、論理は明快、確信に充ちている。

近頃の仏教研究の論攷には、客観性や合理性はあっても、自己の確信を語るものが尠くなった。この点、博士が、「私の主張」とみずから題し、責任ある所論を展開しているのは爽快な感すら与えられる。それが多年の研鑽に裏づけられているからには、なおさらである。

博士の所論が、なぜ明快であり、確信に充ちているのであろうか。後章で次第に明らかになる如く、博士が「天台教学の基本理念」を追究してやまず、ついには「宗学の本質」を明らかにする意図を有されることに、それは起因するといえよう。

単なる知的関心から惹き起された興味本位の論争でないところに、本論争を不毛な戯論から救いあげ、実りあるものとした真因があると云えよう。

もっとも知的関心がなければ論争そのものが成立しない理であるが、博士の学風は、人も知る文献考証には綿密精緻で、学界の信頼深きものがあり、従って論争内容に質的な高度が常に保たれていたのも、本論争を意義あるものとしている。

さて、かかる「私の主張」に対する賛否の両論であるが、編者の最も苦心したのは、これら数多い論文の位置づけといふか、分類であったらう。賛否の立場が明瞭なものは問題な

いが、教判上の込み入った論争だけに、一概に賛否を決めかねるものが存するであろうことは察するに難くない。

そこで第三章では、「現代諸学者の反応」として、やわらかくこれらを受け止め、小寺文穎氏（叡山学院）のもの二篇、武覚超氏（叡山学院）のもの一篇、池田魯参氏（駒沢大）のもの五篇、浅田正博氏（竜谷大）のもの一篇。仲尾俊博氏（種智院大）のもの一篇、林真芳氏のもの一篇、三友健容氏（立正大）のもの一篇、池山一切円氏（叡山学院）のもの一篇、さいごに、かくいう筆者のもの一篇、と実に十数篇の論文が挙げられている。

そのうち、「現代諸学者の反応」という第三章には、小寺、武、池田、浅田、仲居、三友、林、の計七氏の論文がまとめ掲載されている。

小野氏の二編は「印・仏・研」紀要に掲載されたものであり、紙幅の関係上、小篇であるのは残念である。武氏のものも、「天台学報」所載のもので、憾むらくは小稿である。これに対して、池田氏の五篇は、「印仏研」の三篇をのぞけば、『駒沢大仏教学論集』に掲載された二篇は、かなりの分量で、五篇併せると一五四頁を占めている。分量だけから云えば、博士の「私の主張」に比すべきものがある。

つづいて、浅田正博氏の一編は、やはり「印仏研」所載のものであり、仲居俊博氏の一編も同様である。三友健容氏の

一篇は『立正大学論集』に掲載され、やや分量があるというものの、本書の一〇頁前後を占めるにすぎない。さいごの林氏的一篇も、「印仏研」のものである。

以上、七氏十二篇の論文が、第三章の「現代諸学者の反応」の中に収められている。というのは、残りの池山一切円氏の一一篇と、筆者のものは、第五章 同調論の中に入れられている。同調論には、ちょっと古いが、昭和十一年に発表された佐藤泰舜京城大教授の長篇(京城帝国大学文学部論纂)が、さらに付け加えられている。本書の四五―四八五頁まで、三〇頁を越す分量である。なぜ佐藤泰舜教授の此の論文を全文掲載したのか。後ほど触れることがある。

このような構成上の配慮を、第三章と第五章に施した上で、その間に、すなわち第四章に本書のハイライトともいべき、佐藤哲英博士との論戦が展開される。「反対論とその駁論」がこれである。

本書の二九五―四四五頁まで、実に四分の一にちかい部分を占め、編纂の目的が奈辺にあるかを明瞭に示すと共に、論争の主なる相手が誰れであったかも、同時にもの語って興味ふかい。内容も、一見して、論争の形式を踏んでおり、東西を代表する天台学の巨匠が、まさに四つに組んだ観がある。

これに比すれば、第三章の「現代諸学者の反応」に収められた十二の論文は、新進気鋭の研究者の手になったというも

の、池田氏のもののをのぞけば、いずれも小篇で、するどい見解もみうけられるが、論点すべてをカバーするだけの紙幅を持っていない。

ただ、池田氏のもののは、前記する如く、それらの中で、はなはだ長編であり、あきらかに駁論である上、それもかなり激しい内容を含んでいる。

本来なら、これら後進の反対論をも、委細かまわず痛駁すべきであろうが、関口博士にとっては指導の立場にこそあれ、論争の相手でないのは明らかであるから、ともに天台研究の道を歩むその将来性を大切にされた配慮からか、ことさらに「現代諸学者の反応」として、やんわり第三章にまとめられた真意には、深く敬意を表するものである。

とすると、第五章の同調論に収められている小生の、ジャーナリズム掲載の粗雑な小稿など、いわば刺身のツマで、載せていただくだけで恐縮のかぎりである。

以上のような、いわば大人の配慮のもとに、論争の主目標に対置された、佐藤哲英博士は、両者ほぼ研究世代を同じくし、その研究業績といい、キャリアといい、何人も認めるところ、反対論の中心にとうぜん据えられて然るべき方である。佐藤博士以上の論争相手を、宗外に求めることは、けだし安藤俊雄博士亡き現在不可能であろう。

また論争そのものの性質上、佐藤博士が関西の学界にあ

り、いま言う如く他宗の人であったことも、論争をいっそう際立たせる意味を持っていたと思われる。

第四章は、こうして疑義を立てる佐藤論文と、これを駁する関口論文とが交互に配されて、『論争の経過』が瞭然と示されている。いま、その体裁のみを出せば

(一) 関口博士の五時八教廃棄論への疑義 佐藤 哲英

浅田 正博

(二) 天台教相論について 関口 真大

——佐藤博士の疑義に対する疑義——

(三) 天台五時八教論について 佐藤 哲英

——関口博士の疑義二十五カ条に対する回答——

る回答——

(四) 天台大師教学の綱要 関口 真大

(五) 天台教相に関する論争の経過と結末 関口 真大

(六) 天台大師の教相論について 佐藤 哲英

——関口博士の所論に関連して——

(七) 頓漸五味論 関口 真大

(八) 天台大師の教相論 関口 真大

(九) 文献としての天台三大部 佐藤 哲英

——関口博士との論争と立場の相違——

と、いうことになる。近来まれにみる、継続発展した論争であることが肯かれる。

ただ、かかる論争の経過を、一般にわかり易く解説するだけの紙幅が、書評をかねた本稿では、いささかムリなのが残念である。

というより、今次の論争には、双方まことに微妙な研究姿勢と立場の相違があり、両先生から指教を受けた私としては、それが或る程度うかがえるだけに、おそらく私見が加わるであろう解説すら筆が重いというのが、正直なところである。

それに、この度の論争には、事情もあって私は最後のころ一寸顔を出した程度で、本格的には加わっていない。論争資料がこのように整備された現在、これが客観的批判は、また他に人もあろうし、私としても稿を改めて他日を期したい。とり敢えず、通りいっぺんの書評に了ることをお許し願う次第である。

それにしても、佐藤哲英博士は、「私の研究態度」と題して、

「私たちは関口博士と同じく天台大師の思想教学に限りなき尊敬の念をもってその研究をしておりますが、私たちは天台宗徒として祖師たる天台大師の研究をしているのである、仏教学の立場から天台大師の思想に深い関心をもって研究をすすめているものです。そして私がしている天台大師の研究は、大師の全著作を一々吟味検討してあるべき位

置におき、その文献資料に基いて天台大師の全生涯における思想進展を趾づけようという試みです。」（同書四二九—四三〇頁）

と述べ、自己の研究姿勢を明確に示したのち、いわゆる「宗教と仏教学」との関係論じ、

「宗学とはその宗派の長いあいだの伝統によって築きあげられたもので、天台学または天台教学と呼んでいるのは、まさしくこの天台宗の伝統宗学です。これに対し、同じく天台の学問をしつつも、従来の伝統宗学にとられず、全く自由な学究的態度より研究をすすめるものがあり、しばらくこれを仏教学の立場と申しておきましょう。実をいうと私の天台大師研究もこの二つの研究態度を混同していることがしばしばあるのですが、元来天台宗徒でない私ですから、私は伝統宗学にとられない仏教学の立場に立つて、批判的態度をとって自由な立場から研究もし発言もしているのです。」（同書四三二—四三三頁）

その背後にはおそらく島地大等、上杉文秀以後の最大の業績であろうと云われる、同博士の名著「天台大師の研究」があることはいうまでもない。

現在それは、厳密な文献考証に基づく、自由批判的研究の最大の成果というべく、われわれ宗外研究者たちの一大指針となっている。

そして佐藤博士が、かかる研究実績の上に立たれて、寸分と雖も自己の研究態度を崩すことなく、極めてクールに自説の貫徹に終始されたのは、当然のこととは言いながら、感嘆の外はない。

と同時に博士は、また一方で伝統宗学そのものの取扱いに触れ、

「けれども私は伝統宗学を無視したり破壊しようなどとは毛頭考えておりません。永い歴史をへて築かれてきた伝統宗学に深い敬意をささげています。」

「私は天台大師の研究を私のライフワークとしてすすめてきました。私は天台宗徒ではありません。けれど私は天台の伝統宗学を粗末にしてはならぬものと考えており、学問上の立場の相違から意見の合致せぬものがあつた場合には、時間をかけて慎重に対処してゆきたいと考えています。」（同書六七六頁—六七七頁）

と述べて、伝統宗学への理解を、宗派は異なれど、宗門人一般の立場から、充分示されている。

このような周到綿密な上に展開された佐藤博士の所論を、詳しく紹介できないのは誠に残念であぬが、要は、一方において、かかる仏教学的立場からの精緻な反論があつたからこそ、関口博士の立論も、ことさらにキメ細かくなり、遂には完整されていったものと思われる。

関口博士にとって幸福なことは、同じ高水準の批判的研究者が一方にいたということではあるまいか。論争過程を通じて、内容そのものが次第に緊密化されてゆくのは、如上のことをも語っている。

それにしても、惜みても余りあるのは、かの安藤俊雄博士の先立って逝かれたことである。安藤博士は、晩年身辺多忙のためか、この論争には、会場に顔をお見受けしたことはあったが、直接筆を執られた形跡はなかったようである。

しかし、「五時八教廃棄論」は、それは諦観の「天台四教儀」廃棄論と連動し、四明教学の批判となるわけであるから、四明教学の研究に多くのすぐれた業績をのこされた安藤博士からの、まとまった御意見が是非とも欲しかったと思うのは私ばかりではあるまい。

四明天台の研究は、関口博士の言う如く、日本天台からはそれほど重要な意義を持っているとは云い難く、従ってそのウィークポイントを衝いたともいうべき安藤博士の四明研究は、客観的な宗外研究者だからこそ、可能と欲しくべく、それ故にこそ佐藤博士と並んで、その見解が聞きたかったところである。

それはさて置き、第四章は、如上の論争経過を踏えて、さいごに「五時と五味」の真意を高調して終っている。

第五章は、先に触れた如く同調論で、再説を避ける。

「五時八教」論争の収束（山内）

かくして第六章において、いよいよ論争の成果というか結末というか、「天台教学の基本理念」が、「五時八教教判論の起元」から始って、「宗学の本質」に至るまで、前後六節に分って詳説される。

ここまでくると、もう天台「宗学」だけの問題とも、それは言えようが、そこには教学論争が次第に「宗学」論争へと発展——結実してゆく過程が窺われて、無限の肝銘をあたえられる。現代的にいえば、仏教学と宗学との接点が奈辺にあるかを示す、好箇の例証といえよう。各宗の宗学界の課題である、普遍化と特殊化の矛盾超克を、それは現実に示している、この点からも関口博士の功績は測り知れないものがあると思われる。

その意味で、日本仏教全体が、「宗学とは何か？」という根源的問題を、再思再考する結果ともなれば、それが宗教活動の源点である故に、両先生の今次論争の労苦の一端はあるいは酬いられるのではあるまいか。天台用語を気にせず、切に一読をおすすめする次第である。

さて、終りの第七章は、「新しい天台学の構成」と題されて、新しい天台学の——それは新しい天台宗学と称すべきものであるが——構築が企図されている。私をして云わしめれば、それは更に生成発展すべき未来を蔵しているものであらう。

そして、最後に「五時八教」に代るべきもの——『天台四教義』に代るべきもの——に論及され、多くの実例を出されて、読者をひとまず安心させている。まことにゆき届いた論争の収束という外はない。と同時に、博士の意図した現実的な課題が何んであったか？ をも示していて興味ふかい。

× × × ×

それにしても関口博士は

「私自身が天台学入門の当初に『天台智者大師、五時八教をもって東流一代の聖教を判釈したまうに罄きて尽きざるはなし』と暗誦させられて、夢にもそれを疑うことをせず、『五時八教論』に精進すること、それが天台学である」と信じて」（同書六七六頁—六七七頁）

半世紀に及ぶ研學につとめられた結果、こんどは逆に、「五時八教」そのものを、若き日に情熱を傾けたであろう『昭和校訂天台四教義』まで廃棄されるに至った自己研鑽の歷程を、随処にくりかえし語っておられる。

往昔と異って、世襲化されてゆく宗門に生きる学人の、学と信とを共に求める、真摯なすがたが、そこに見てとれて、胸を打つものがある。

たんなる知的本位の論争ならば、時とともに忘れ去られましょうが、その中に信の一分だにあれば、不滅の足跡とはな

るであろう。

× × × ×

なお、佐藤泰舜禅師の「経典成立史の立場と天台の教判」が、第五章 同調論の中に全文掲載され、関口博士は

「もしその当時にこの佐藤泰舜師にこのような論文があることを知っていたならば、私は大いに喜んでこの論文を引用し、かつ安心して私の五時八教廃棄論を展開する緒としたであろう。」（同書四五〇頁）

と云い、いくつかの例証を挙げて

「私の所説と全く軌を一にしているところが多い。」（同書四五二頁）

と述べ、同論文を極めて高く評価している。

博士は、この論文の所在を、発表当時の昭和十一年頃はずらず、昭和五十年になって、ソールの東国大学からリコピーして送ってもらったと記している。（同書四四九頁）

当時の佐藤泰舜教授が、洞門出身のせいであろうか、駒沢大学図書館には、京城帝大文学部論纂があり、戦後まもなく、天台教学の研究に手を染め出したころ、この論文を筆写したことを覚えている。

同論文は更に、佐藤泰舜禅師の中国仏教関係の諸論文を集めた『中国仏教思想論』にも、再録されている。

昭和五〇年ごろまで、関口博士の眼に触れなかったのは奇異な感もするのであるが、駒大関係者は、如上の理由から、同論文の存在は知っているのである。ただ、その真価を知っていたか？は、いまとなっては疑問であるが。

このたびの論争で、駒大の池田魯参氏が、いちはやく、この論文を、論争資料に使った（同書二〇頁参照）のは、以上の経緯からで、池田氏は、戦後再録された『中国仏教思想論』から、この論文を引用している。

単に、論文の存在を知っていたかどうか？、ということなら時間の遅速にすぎない。この際大した問題ではないであろう。要は、この論文をいかに評価するかにある。

関口博士は、前述した如く、極めて高い評価をあたえられているのであるが、佐藤泰舜教授が同論文を発表された昭和十年前後は、洞門学界は、いわゆる和辻哲郎博士による沙門道元の再発見に始まり、秋山範二氏の「道元の研究」へとつづく、一般哲学界の道元研究を背景に、宗乗を近代宗学へと脱皮せしめるべく、苦悩していた時期である。その中心的存在であった衛藤即応博士にも、奇しくも「宗義と史実」（昭和九年）なる論文があり、立場こそ異なれ類似の主張を展開している。

衛藤博士の方が、やや先輩となろうが、両師は互に畏敬し合った間柄であることより察すると、どうも昭和十一年（昭

和十年秋脱稿）の佐藤泰舜教授のこの論文は、洞門における宗学形成のための、教学的側面から打たれた犠打のようにも思われてくるのである。

後に貌座にのぼられた佐藤泰舜禅師に、宗学への関心がなからうはずはなく、このような視座から眺めると、今般、関口博士の大きな賛同を得た同論文の真価が、かなりはつきり理解されてくる。

即ち、それは近代宗学形成への、教学的な基盤を提供する内容を有しているのではないかと。

関口博士の今次の論争は、はからずも宗学の本質論を引出した。他人事ではない。足下のこととして、同論文を詳究してみたい。